

平城宮第33・70次調査 出土冶金関連遺構・遺物の 再検討

1 はじめに

平城宮第二次大極殿院・内裏東外郭の区域において実施された調査には、第19次（1964年度）・21次西（1964年度）・26次（1965年度）・33次（1966年度）・35次（1968年度）・70次（1970年度）がある。

第33次調査では、顕著な冶金関連遺構は検出されていないが、冶金関連遺物が出土している。第70次南調査では炉跡は検出されていないが、冶金関連遺物を出土した小穴や土坑が発見された。第70次北調査ではSX6821を始めとする炉跡やピット群・土坑が十数基検出された。これらの遺構・遺物はSD2700出土冶金関連遺物に関係が深いと考えられる。今回、主として第33・70次調査出土冶金関連遺物・遺構を再検討することにより、この区域の冶金関連工房について考えてみたい。

2 調査と冶金関連遺構・遺物

第33次調査 第26次調査区を挟む様に接する調査区が設定された。内裏東外郭南区画南半に相当する。礎石建物2棟、掘立柱建物10棟、築地塀3条等が検出されたが、炉跡等は出土していない。

遺構は4時期に区分され、SB3530と礎石建物SB4300はA期に、SB3430・3550はC期に属す。いっぽう、第26次調査では7期の変遷が考えられており、SB3530はB期に、SB3430・3550はE期に属する。

出土遺物には土器類、瓦類と冶金関連遺物7点以上があり、他に第26次で銅錢が出土した。冶金関連遺物は調査区南辺付近で出土したが、いずれも遺構にはともなわない。うち5点以上がSB3530南妻付近出土。

第70次南調査 第33次の南に接する。第二次大極殿院東外郭に相当する。礎石建物1棟、掘立柱建物7棟、築地塀1条などが検出され、冶金関連遺物を出土した土坑1基・小穴1基がある。

遺構は大きく3時期に分けられ、B期がこの区域の中心的な時期とされる。C期には礎石建物SB7500の東側一帯が整地され、建物は掘立柱建物SB6730のみとなる。

遺物は北部の土坑SK6750・6800・6810などから多

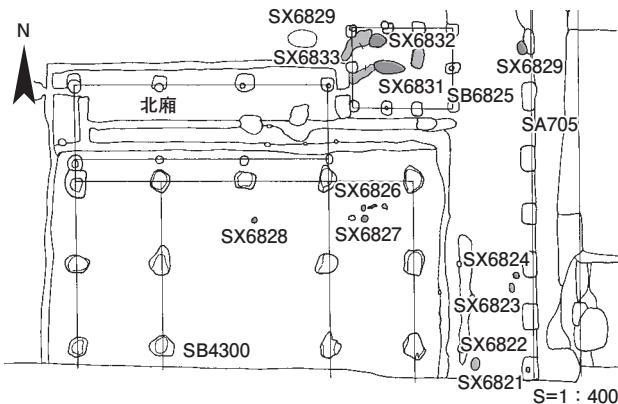


図61 第70次北調査冶金関連遺構配置略図

数の瓦類、土器類が出土、奈良末期の土師器も一括して見つかっている。冶金関連遺物はSK6750から4点、SB7500北側のSA6760南端柱穴から1点、遺構にともなわないものが2点出土した。

第70次北調査 第33次の北に接する。内裏東外郭南区画北半に相当する。礎石建物1棟、掘立柱建物2棟、築地塀3条などが検出された。第33次で南半部を確認したSB4300の北半部が検出され、北妻西3間分に北廂を後補したことがあきらかとなった。SB4300の北東隅に近接して小規模な掘立柱東西棟建物SB6825が、その東妻柱列をSB4300の基壇東端に筋をほぼ揃えて配置される。

冶金関連遺構には炉2基、炉あるいは焼けた土坑・小穴6基、焼土面3面、冶金関連遺物や炭・焼土等を多く含む不整形な溝状遺構2基がある。これらは、SB4300北東隅内側、SB6825内と周辺部、東外郭東面築地SA705内縁に分布している。

出土遺物は瓦・土器類が多数を占める。冶金関連遺物は上記の冶金関連遺構から14点以上、その他の遺構から5点以上出土し、他に遺構にともなわないものが7点ある。

3 冶金関連遺構・遺物の分類・分析

第70次北調査冶金関連遺構 SB4300内には鋳銅関連の炉跡ないし焼けた穴、あるいは焼け面SX6826～6828がある。SX6826は、径が35cm前後の円形焼け穴1基と不整形な焼土面2面が東西にならび、焼け穴からは土器が出土した。SX6827は、径35cm前後の円形焼け穴で、内部には炭化物が堆積し、不定形熔結銅小片が出土している。SX6828はSX6826・6827の西約4mにある炉跡。径約30cm、深さ約20cmの円形坑内面に黄色土が貼られ、貼り土表面が赤色に焼ける。内部には焼土が充満し、その上面で坩堝ないし取瓶の底部片が出土した。

SB6825の内部と周辺からはSX6831～6833が検出された。SX6831は、東西約200cm、南北約108cm、深さ約25cmの楕円形土坑で、南壁の一部が焼けている。内部には底から炭層・炭混黄褐色土層・黄褐色土層・灰褐色粘質土層・炭層・黄褐色土層が交互に堆積し、礫・瓦・焼けた瓦・轆羽口片・鉄滓付着瓦片などが出土した。あるいは鉄鍛冶炉跡か。SX6832は鉄鍛冶炉跡で、東西84cm、南北80cm、深さ25cmの楕円形土坑内に、底部から焼土混灰黒色土層・炭層・焼土混炭層・炭層・黄褐色土層が交互に堆積し、黄褐色土層上面が焼けて硬く固結する。鉄分が多く認められ、焼結層上面には炭層が堆積し、鉄滓が出土した。SX6833は2基の不整形な溝状の窪み。1基は長さ約1.8m、幅約0.6m、他は長さ約1.2m、幅約0.4mで、焼土や灰・炭、炭混黒色土などが堆積し、轆羽口片・取瓶ないし埴堀片・焼けた瓦などが出土した。

SA705内縁部からは、炉跡SX6821、炉跡ないし焼け穴SX6824・6829、焼礫出土土坑SX6822、赤色の焼け面SX6823がある。SX6821は径35cmの円形を呈し、底面で取瓶が検出された。SX6824は径35cmの円形を呈する。SX6829は円形を呈し径約50cm、深さ約20cmあり、内部には赤色焼土が充満していた。SX6822は径が65cm×50cm、深さ約30cmの楕円形坑で3個の焼礫が出土。

第33次冶金関連遺物 鉄関連遺物は①灰色椀形鉄滓、②灰褐色椀形鉄滓、③褐色椀形鉄滓など。銅関連遺物には①大型取瓶の片口片がある。他に銅鉄の種別は不明ながら轆羽口がある。大型取瓶は飛鳥池遺跡に類例がある。

第70次南冶金関連遺物 SK6750からは①褐色椀形鉄滓+小礫、②不定形熔結銅、③埴堀、④羽口先端片が出土した。埴堀の蛍光X線分析では銅と金が検出された。

第70次北鉄関連遺物 鉄関連遺物には、①板状鉄（？）片2点、②褐色椀形鉄滓、③褐色椀形鉄滓+小礫、④褐色鉄滓小片、⑤鉄滓小片等が認められる。鍛造剥片類は採取されていないが、椀形鉄滓はいずれも小型の鍛鍊鍛冶滓。小礫を噛み込む鉄滓は飛鳥池遺跡、平城宮第32次・32次補足調査、SD2700でも出土している。

上述のように、鉄滓はSX6831・6832で出土しており、褐色椀形鉄滓+小礫はSX6832ないし6833から出土、褐色鉄滓小片はSX6831の東北に接する土坑からも出土している。板状鉄（？）片はいずれもSB4300の西外側での出土。

第70次北銅関連遺物 銅関連遺物には、①埴堀ないし取瓶、②轆羽口、③不定形熔結銅、④不定形熔結銅+銅滓、⑤白色砂粒胎土の炉壁等がある。

埴堀ないし取瓶はSX6833から出土。轆羽口はSX6831から小片が、またSX6832ないし6833から出土しており、遺構にともなわないものも1点出土した。不定形熔結銅はSX6826ないし6827、SX6824の西側の小穴、SB6825の東柱穴などから出土した。東柱穴のものは堀方あるいは柱抜取穴からの出土かは不明。不定形熔結銅+銅滓はSX6831から微小片が出土。SX6831のものは混入か。白色砂粒胎土の炉壁はSX6832ないし6833出土。

4 出土遺物からみた冶金関連業

この地区での冶金関連業の時期は、SD2700出土冶金関連遺物との関連からみて、天平年間前後以降に位置づけられ、同出土量からは天平宝字年間前後以降が中心。

冶金作業の中心は内裏東外郭南区北東部で、特にSB6825内と周辺、SB4300北東隅、SA705内縁北部にある。わずかながら同区南西隅と第二次大極殿院東外郭北半部にも見られる。業種は鉄鍛鍊鍛冶と鋳銅および金加工を確認したが、SD2700で認められた鉛銅合金加工は、今回確認できなかった。

工房に使用されたSB6825は遺構の重複関係を検討した結果、SB4300北廂が付く以前から設けられていた。銅鉄両業種が混在するが、層位からみて鋳銅が古く鉄鍛冶が新しい。SX6831は検出状態では大型であるが、SD2700出土品を含めても精鍊鍛冶滓が見られないので、精鍊鍛冶炉と断定はできない。SB6825の工房とSX6826～6828、SX6821～6824・6829との関係は不明である。

今回の再検討では、蛍光X線分析について当研究所保存修復科学研究所の協力を仰いだ。記して謝意を表する。

本報告は、科研費基盤研究（C）「古代の鉛調整加工技術に関する考古学的研究」の成果の一部である。

（小池伸彦）

参考文献

奈文研『平城宮28・29・33次概報』5～7頁、1966。

奈文研『平城宮69・70次概報』6～14頁、1971。